

元気なうちに、「子ども世代」に引き継ぐ



長池公園・里山田植えの様子。

NPO法人エヌピーオー・フュージョン長池

富永一夫



『NPOの後継者』——多くのNPO/NGO、ボランティアグループが世代交代に悩むなか、「後継者」をタイトルにした書籍を見つけた。これは、NPO法人エヌピーオー・フュージョン長池(以下、NPOフュージョン長池)における世代交代について、同法人の元理事長である富永一夫さんが著した本である。

ゼロから「土台をつくった第一世代」である富永さんに、世代交代の経緯と現在の状況についてお話いただいた。

●「子ども世代」に引き継ぐ
〜実力がないゆえの「強み」
を生かす

NPOフュージョン長池の設立は1999年。公園の管理・運営をベースに、地域のさまざまな資源や人をつなぎ、暮らしを支える「全方位型NPO」だと富永さんは表現する。

2017年4月度より理

事長の座を田所喬たかしさんに渡した。富永さんと田所さんの年の差は26歳と、親子のような世代差である。富永さんは言う。「多くの組織の世代交代は、5〜10歳若返る程度。しかし、その程度では力の差は小さい。故に、これまでのやり方を突然変えてしまう可能性がります。和菓子のお店で洋菓子をいきなり出したら、お客さんは混乱してしまいますよね。



現理事長の田所喬さん(写真右)。

まずは和菓子づくりをしつかり受け継ぎ、その上で、時代に合わせて材料を変えたり、洋のテイストを加えるなどの創造をするなら、イメージは壊れないと考えたのです。そのためには、この活動を丸飲みにして継承する人を必要としました」

理屈は理解できるが、経験の浅い若者に託すことに不安はなかったのだろうか。その問いに対し、「いつの時代も未来は若者の無謀とも思える情熱が開いた」と富永さんは答えた。

では、実力がない若者の将来性をどう見極めているのだろう。富永さんは、スタッフは1人として公募していないと言う。若者はみなインターンシップを経ており、スタッフが「あの人とならやっていけそう」と言った人を選ぶ。そこに出てくるキーワードは、調和と個性。一緒にやれる純粋な人であれば、仕事力は後からついてくるという確信だ。

●「車を降りる」勇気

後継が育ってから辞めるという考えでは、世代交代は難しいそうだ。「車の運転にたとえると、横で見ていただけでは、運転できるようになりませんよね。思い切って助手席に乗り換え、運転をさせる(実務を渡す)ことが必要。助手席ならブレーキに手が届くから、事故は防ぐことができます。その後、後部座席に移り、最終的に別の車に乗り換えるのです」

若者なら運転に早く慣れる。田所さんはわずか1年で理事長職をこなしているという。富永さんは会長ではあるが、7〜8割は別のオフィスで過ごしているそうだ。

「代表を降りたら何もなくなる」と考える人もいますが、辞めても仕事がたくさんあります。高齢になっても職を辞さず、代表者が突然亡くなった活動が頓挫する例がありました。そうなる、例えば、居場所づくり活動であれば、利用者は行き場をなくしてしまいます」

しかし、富永さんのようにまだ体力も若さもあり、影響力のあるリーダーの場合、周